

最新高等院校日语专业系列教材

日语古典文法



华东理工大学出版社

徐曙◎编著



日语古典文法

最新高等院校日语专业系列教材

徐曙◎编著



华东理工大学出版社

上海



图书在版编目(CIP)数据

日语古典文法 / 徐曙编著. —上海:华东理工大学出版社, 2016.1

ISBN 978-7-5628-4386-3

I. ①日… II. ①徐… III. ①日语-古代语法-高等学校-教材 IV. ①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 224783 号

策划编辑 / 王一佼

责任编辑 / 嵇 蕾

装帧设计 / 靳天宇

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电话: 021-64250306

网址: press.ecust.edu.cn

邮箱: press_zbb@ecust.edu.cn

印 刷 / 常熟市新骅印刷有限公司

开 本 / 710mm×1000mm 1/16

印 张 / 18.5

字 数 / 370 千字

版 次 / 2016 年 1 月第 1 版

印 次 / 2016 年 1 月第 1 次

定 价 / 35.00 元

版权所有 侵权必究

前 言

むかし男ありけり。その男、身を要^{えう}なきものに思ひなして、京^{きやう}にはあらじ、東^{あづま}の方^{かた}に住むべき国求めに、とて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりして行きけり。道知れる人もなくて、まどひ^い行きけり。三河^{みかは}の国八橋^{やっはし}といふ所にいたりぬ。……

ムカシ[ヒトリノ]男ガアッタ。ソノ男ハ、ワガ身ヲツマラナイ者ニ思イコンデ、京ニハ居ルマイ、東国ノ方ニ住ムニフサワシイ国ヲ求メニ、[行コウ]、トイッテ出カケタ。以前カラ友ダチトスル人ヒトリフタリデ行ッタ。道ヲ知ッテイル人モナクテ、サマヨイナガラ行ッタ。三河ノ国八橋トイウ所ニ到着シタ。……

上述文章分别是日本平安时代的作品《伊势物语》中的一节及其现代日语的译文。对照一下可以发现，两段文章共同的用词很多，文章结构也相似，但普通日语学习者却无法很顺畅地读懂前面的古文。日语古文中有着现在已经不再使用的词汇，还有与现代日语语义不同的词汇。尤其是助动词、助词与现代日语区别很大，用言的变化形式也不同于现代日语。因此，阅读古典作品，需要借用辞典等来了解不明单词的词义，同时还必须了解、掌握古典作品中用言的变化及助动词、助词的用法。本书就是为满足日语学习者及日语教学者的此种需求而编写的。希望日语古典语法的学习能成为读者对日语本身进行重新审视的契机。

“日语古典语法”是日语专业的核心课程，在日语专业八级考试及报考日语专业研究生的考试中，日语古典语法也为必考内容。

古文语法乃现代语法之基础，语法是构成文章骨架的基本理论。文章的正确理解及表达是要依靠语法来保证的。对于日语专业的学生以及从事日语教学工作的教师来说，要真正掌握好日语、了解并理解日本文学、日本文化等专业

知识,日语古典语法及古典作品的学习是必不可少的。

一般来说,语法学习有研究性学习与实践性学习两种。语法的研究性学习是专家学者的学习,而实践性学习则是用语法或借助语法来学习,是学习语法的运用方法或规则。在日语古典语法的教学中,应该对学生强调实践性学习。学生在阅读理解日语古文时所需要的语法知识应该通过实践性学习来掌握。学生需要了解古文语法的基本规则,但不必花很大精力对古文语法进行专业性的学习。古文语法的教学不能让学习者因为学习内容过于理论化而失去兴趣。因此,本书在编写过程中,始终贯彻实践性学习这一原则,尽量挑选日语古典作品中比较精彩有趣的文章及诗歌作为解释说明古文语法的实例,目的是让学习者在了解日语古典语法规则的同时,欣赏到日本古典作品的精彩有趣之处。考虑到学习者在今后考研或从事翻译工作时,难免会遇到我国古典精品唐诗宋词及成语谚语的日译,本书在后半部分特意编著了“汉文训读”章节,将我国古文中的名作佳篇及唐诗宋词中的经典诗句作为日译的实例,促进学生掌握日语古典语法的要领。

本书每一章节后面都配有练习实例,这些练习的完成结果也是检验学习者日语古典语法基本素养和文化底蕴的一个参数。

本书在编著过程中,得到作者的友人、日本国大阪大学前教授宫崎和夫先生和同济大学日语系吴侃教授对本书书稿进行了仔细的审阅和指导,参加本书编写的人员还有叶圣超、段睿珏、胡悦、赵文暖。在此表示由衷谢意。

徐 曙

2016年1月1日

目 次

第一章 古文の基礎知識	1
第一節 古文の仮名遣い	2
第二節 古文の言葉の単位	7
第三節 古文の文の構造	10
第二章 品詞と品詞分類	19
第一節 主部となる自立語(名詞)	21
第二節 修飾部となる自立語(連体詞・副詞)	25
第三節 接続部となる自立語(接続詞)	35
第四節 独立部となる自立語(感動詞)	43
第五節 述部となる自立語(動詞・形容詞・形容動詞)	48
第六節 付属語(助動詞・助詞)	72
第七節 活用のある付属語(助動詞)	73
1 助動詞の分類	73
2 時の助動詞(き,けり,つ,ぬ,たり,り)	75
3 推量の助動詞(む(むず),べし,らむ,けむ,らし,めり,まし) ...	86
4 打消しの助動詞(ず)	106
5 打消し推量の助動詞(じ,まじ)	108
6 伝聞・推定の助動詞(なり)	114
7 断定の助動詞(なり,たり)	118
8 自発・可能・受身・尊敬の助動詞(る,らる)	122
9 使役・尊敬の助動詞(す,さす,しむ)	128
10 願望の助動詞(たし,まほし,ごとし)	135
11 比況の助動詞	137
第八節 活用のない付属語(助詞)	139
1 助詞の分類	139

2	格助詞(が,の,を,に,へ,と,より,から,にて,して)	143
3	接続助詞(ば,とも,ど,ども,が,に,を,て,して,で,つつ, ながら,ものの,ものを,ものから,ものゆゑ)	151
4	副助詞(だに,すら,さへ,のみ,ばかり,など,まで,し)	159
5	係助詞(ぞ,なむ(なん),こそ,や,やは,か,かは,は,も)	163
6	終助詞(な,そ,ばや,なむ(なん),てしが(てしか),てしがな (てしかな),にしが(にしか),にしがな(にしかな), もがな,がな,もが,な,かな,か,は,も,かし)	171
7	間投助詞(や,よ,を)	175
第三章 敬語表現		178
第一節	尊敬語	185
第二節	謙讓語	191
第三節	丁寧語	195
第四章 修辭法		198
第五章 漢文		205
第一節	漢文訓点のきまり	207
第二節	書き下し文の作り方	213
第三節	返読文字	216
第四節	再読文字	219
第五節	漢文のしくみ・熟語の成り立ち	223
第六節	助詞のいろいろ	226
第七節	よく出る句形(1)否定形・禁止形	230
第八節	よく出る句形(2)使役形・受身形	233
第九節	よく出る句形(3)疑問形・反語形	236
第十節	漢文読解に役立つ漢字	239
附録: 日本古典文学略年表		246
練習問題解答		255
参考文献		288

第一章 古文の基礎知識

古典の文学が現代の文学に影響を及ぼし、古典のことばが現代語の基になっていることは、特に日本に限ったことではなく、世界の文学、言語がすべてそれぞれの歴史の上に成り立っていることは言うまでもない。現代人として、昔の人のものの考え方やとらえ方、また、文化や生活を受け継いでいくことは大変重要なことである。しかしながら、ここで障害となるのが、言葉の問題である。古典に使われていることば(文語)は、現在使われていることば(口語)とは少し違っているために、つい、古典に対してしりごみをしがちである。このことばの障害も、必要最小限の古典文法の知識があれば、簡単に取り除くことができる。たとえば、「秋は来ぬ」という文がある。どのような読み方をして、どのような意味なのか、これは、「来」という動詞と「ぬ」という助動詞についてのちょっとした知識があれば、簡単に理解することができる。

口語には口語の決まりがあるように、文語にも文語の決まり、すなわち古典文法がある。それは、一つの体系をもっている。例えば、品詞というものは、古典に用いられる単語を、いろいろな観点を設定して、分類・整理したものである。この分類によって、個々のことばのはたらきを体系的に理解することができる。また、例えば、品詞の一つである助動詞も、その意味に着目して、分類・整理することができる。一つ一つの助動詞の意味や用法をバラバラに覚えるよりも、それぞれの語の基本的な意味や用法を比較・関連させて学習すると、理解しやすくなる。

ことばは、それを使う人のもののとらえ方の反映である。古典文法は、昔の人のもののとらえ方の体系であるとも言える。古典文法を知ることが、そのようなことばを生み出した昔の人の思考の体系を知ることでもある。例えば、口語の場合と違って、文語では、推量の助動詞が非常に発達している。学者によれば、これは、ものごとを断定的に述べるよりも、遠回しにや

わらかく述べることを第一とする考え方が、平安時代にはあったからだと説明されている。古典文法の知識をただ丸暗記するのではなく、ことばの決まりの背後にある、昔の人のもののとらえ方を想像したり考えてみたりするようにすると、文法の学習が楽しくなる。

古典といえども、いままで習ってきたのと同じ日本語である。ことばの性質に違いはない。まず、理解しようという姿勢をもつことから始めよう。

第一節 古文の仮名遣い

古文をはじめて学ぶとき、どういうところが読みにくいかというと、古典の言葉に慣れていないので読みにくいということを別にすれば、まず、そのかなづかいが現代文のかなづかいと違うという点が考えられる。

古文は古典かなづかい(歴史的かなづかい)で書いてあるから、まずその読み方になれることが必要である。それについて、まず注意されるのは、ハヒフヘホの仮名である。現代文でも、助詞の「は」や「へ」は、こう書いてワ・エと読むが、古文では、そればかりでなく、

かは(川) こひ(恋) 食ふ いへ(家) おほかた

というように、語中・語尾にある「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」は、ワ・イ・ウ・エ・オと読むのが原則である。これらは、もともとはそのかなの通り発音されたものである。(といっても、それは両くちびるを突き出すようにして、ファ・フィ・フッ・フェ・フォというように発音されたと言われている。)それが、後世ワ・イ・ウ・エ・オのように発音されることになったのだが、かなはもとのままに書いているということなのである。それで、現代語ではワ・ア行五段活用(ワイウエ活用)の「思う」「言う」などは、古文では「思ふ」「言ふ」で、ハ行四段(ハ・ヒ・フ・ヘ)活用となるが、読むのには現代語と同じような発音になるのである。

上の原則にはずれるものとして「はなはだ」「あふる」「行かまほし」などがある。また、語の最初に「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」を持つ語が、複合語の下成分となっている場合は、その「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」をワ・イ・ウ・エ・オと読まない場合が多い。

はつはる(初春) かぐやひめ(かぐや姫) をりふし(折節)
 なかへだて(中隔) かりほ(刈り穂)

これには、次のような四つの法則がある。

(1) アウ が オー となる。(au→o)

会ふ → オー かう → コー たまふ → タモー
 あふみ(近江) → オーミ

(2) イウ が ユー となる。(iu→yu)

言ふ → ユー 久しう → ヒサシユー

(3) エウ が ヨー となる。(eu→yo)

えう(要) → ヨー てうづ(手水) → チョーズ
 てふ(蝶) → チョー

(4) オウ が オー となる。(ou→o)

おうな(老女) → オーナ こうち(小路) → コージ

この法則は、ローマ字で書いてみると、わかりやすい。上の例にもあるように、この法則をあてはめるとき、ウと読むはずの「ふ」がある場合は、まずそれをウにしてから考えなければならない。

上の法則にはずれるものとして、次のようなものがある。

たふる(倒る) あふひ(葵) あやふし(危ふし)
 あふぐ(仰ぐ) あふぎ(扇)

これらが、タオル・アオイ・アヤウシ・アオグ・オーギと発音されるのは、アウがオーとなりきる前の発音が残ったものだろうと考えられている。

◇ 次の諸語は、古典語の場合と現代語の場合と、読み方が違う。

買うー買ふ(コー) 洗うー洗ふ(アロー)
 舞うー舞ふ(モー) 習うー習ふ(ナロー)

古典語では、また、「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」のかなが区別されている。これらも、もとはそれぞれ発音の区別があったのであるが、後世区別がなくなったのである。助詞や助動詞の「む」は「ン」と発音する。助詞の場合に「を」を用いるのは、古典かなづかいの名残である。

現在日本で日常使われている言葉を「口語(口語文)」と言い、主に江戸時代まで文章として使われた言葉を「文語(文語文)」と言う。

これから学習する「古文」は、「歴史的仮名遣い」と呼ばれる表記によって書かれていて、平安時代中期にできた形が基本になっている。

「かな」は、もと「かりな」であり、その変化した形「かな」から転じたものである。漢字では「仮字・仮名」と書いた。「な」は文字の意味であり、かりの文字という意味である。

「かな」は漢字と別なものと意識されているが、そもそも「ひらがな」は漢字の省略形から成ったものである。発生時の「かな」は、字体は漢字のままであった。字体は漢字のままだと、本来の表語文字として用いず、その表意性を見捨てて表音性のみを借用したものを、かりの文字という意味で「かりな」と称したのである。本来の表語文字として用いる漢字を「まな(真字・真名)」というのに対する称呼であった。奈良時代の『万葉集』などには、漢字の字体のままの「かな」が使われており、それを「万葉がな」と呼ぶ。

五十音図(文語)

段 行	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	あ	い	う	え	お
カ行	か	き	く	け	こ
サ行	さ	し	す	せ	そ
タ行	た	ち	つ	て	と
ナ行	な	に	ぬ	ね	の
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
マ行	ま	み	む	め	も
ヤ行					
ラ行	ら	り	る	れ	ろ
ワ行					

いろは歌

A いろはにほへと ちりぬるを わかよ たれそ つねならむ
うゑのおくやま けふこえて あさき ゆめみし ゑひもせす

B イロワニオエド チリヌルヲ ワガヨ タレゾ ツネナラン
ウイノオクヤマ キョウコエテ アサキ ユメミジ エイモセズ

C 色は^{いろ}匂^{にほ}へど 散^ちりぬるを わが^わ世^よ 誰^{たれ}ぞ 常^{つね}ならむ
有^う為^ゑの奥^{おく}山^{やま} 今日^{けふ}越^こえて 浅^{あさ}き 夢^{ゆめ}見^みじ 酔^よひもせず

Aの「いろは歌」を音読み通りに書いたものがB、意味を考えて漢字仮名交じりで書いたものがCである。

◆いろは歌の意味◆

「いろは歌」は、平安時代に作られた歌謡である。「かな」四十七字をすべて一回ずつ使って、「世のはかなさ」という思想を歌っている。

現代語訳

桜の花の色は美しく輝くけれど、は
かなく散ってしまう。同じように我々
の世も、だれがいつまでも変わらない
ことがあるうか。いつも変わる無常の
世の奥山を今日越えて行くような人
生で、浅い夢を見るように目の前のこ
とにまどわされまい。酒に酔うように
わけもわからず生涯をおくることも
ないようにしよう。

〈練習一〉

[1] 「いろは歌」のAとBで濁音以外で仮名遣いが異なっている部分を抜き出
しなさい。

例 [は→ワ] [→] [→] [→]
[→] [→] [→] [→]

[2] 前の五十音図のヤ行・ワ行を完成させなさい。

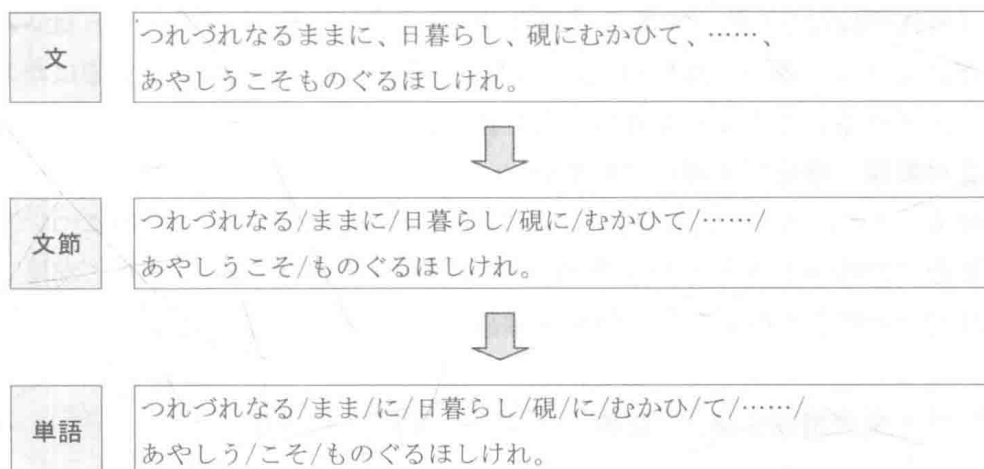
[3] 下線部に注意して、次の文を音読する通りに片仮名で書いてみなさい。

- ① 今は 昔 竹取りの 翁と いふ もの ありけり。
- ② 野山に まじりて 竹を 取りつつ よろづの ことに 使ひけり。
- ③ 名をば さかきの 造となむ いひける。
- ④ その 竹の 中に もと 光る 竹なむ ひとすぢ ありけり。
- ⑤ あやしがりて 寄りて 見るに 筒の 中 光りたり。
- ⑥ それを 見れば、三寸ばかりなる 人 いと うつくしうて ゐたり。
『竹取物語』

現代語訳

- ① 今となっては昔のことだが、竹取りの翁という人がいたそう。
- ② 野山に分け入って竹を取っては、いろいろなものを作るのに使っていた
そう。
- ③ (おじいさんの)名前はさかきの造といった。
- ④ (おじいさんが取っている)その竹の中に、(なんと)根元が光っている竹
が一本あった。
- ⑤ 不思議に思って近寄って見ると、筒の中が光っている。
- ⑥ その竹筒の中を見てみると、三寸ぐらいの人が、とてもかわいらしい
姿で座っている。

第二節 古文の言葉の単位



文章と文

文は、一つのまとまった思想や感情が書き表れ、完結している言葉であり、表記の上ではその終わりに句点「。」がつけられる。このような文が一つまたはそれ以上集まって構成されたものが、**文章**である。

上の『徒然草』序段には、四つの読点「、」が付されており、句点は〈ものぐるほしけれ〉の最後一つだけである。この序段は一つの文がそのまま一つの文章になっていることになる。

文 節 一つのまとまりをなす単位

文章を構成している文は、幾つかの文節から成り立っている。

つれづれなるままに → つれづれなる/ままに 〈二文節〉

日暮らし硯にむかひて → 日暮らし/硯に/むかひて 〈三文節〉

文節とは、意味をこわさない程度に、文を小さく区切ったものであり、発音や意味の上で一つのまとまりをなす単位である。

単 語 最小の単位

文節をさらに分けた、ことばとしての最小の単位が**単語**である。

つれづれなる/ままに → つれづれなる/まま/に

日暮らし/硯に/むかひて → 日暮らし/硯/に/むかひ/て

単語の大別

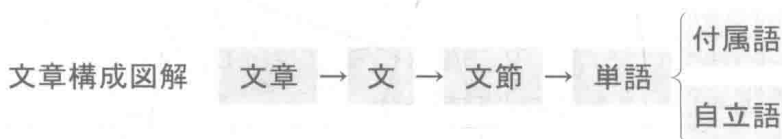
単語は、それだけで文節になることができるものと、できないものとは大別される。

①自立語 単独で文節になれる

〈つれづれなる〉 〈まま〉 〈日暮らし〉 〈硯〉 〈むかひ〉は、それだけで一つの事物や動作・状態を表しているとともに、単独で文節になることができる。このような単語を自立語という。

②付属語 単独で文節になれない

一方、〈に〉や〈て〉は、それだけでは意味をなさず、自立語についてはじめて意味がわかるものである。また、それ自体が単独で文節になることはできない。このような単語を付属語という



複合語 (一つの単語として扱う)

〈心にうつりゆく〉の〈うつりゆく〉は、「うつる」と「ゆく」という別々のことばが一つになったものである。このように、二つ以上の言葉が結合してできたものを複合語という。(夏雲・離れ住む・名高し)など。

こうした複合語の中でも、〈国国〉、〈泣く泣く〉のように同じ語が重なったものを畳語(じょうご)という。(木木・ゆくゆく・たまたま)など。

なお、〈お姫さま〉は〈姫〉という語を中心に、〈お〉と〈さま〉がついたものである。また、〈若やぐ〉は〈若し〉という語に、動作をあらわす〈やぐ〉がついてできたことばである。これらを特に派生語ということがある。(散る→散らふ・高し→気高し)など。

◇文を文節に区切ること

- ・山路を/登りながら/こう/考えた。
- ・山路を/登りつつ/かく/考へつ。

古文は用語が日常的でないだけに文節に区切るのも難しく感じられる。「つつ」や「つ」などの付属語は、単独で文節になれないことが目安になる。また、「ネ」の入るところが文節の切れ目であり、一文節中には必ず自立語が一つだけある。したがって、「山路登りつつ」は二文節になる。

〈練習二〉

[1] 次の括弧①～③に、それぞれ適当なことばを書き入れなさい。

文章を構成する単位は①[]であり、①[]はいくつかの文節から成り立っている。①[]を文節に区切るときの目安は、次のとおりである。

1. 一つの文節には、必ず一つだけ②[]がある。
2. ③[]はそれ自身で文節になることができない。常に②[]の後につくことで文節の一部となる。
3. 一方②[]は、③[]を伴わずに、それだけで一つの文節を構成することができる。
4. 一つの文節の中で、③[]が②[]の前に位置することはあり得ない。③[]はいくつあっても、決まって②[]の後につく。なお、文節を構成する②[]や③[]のことを単語という。単語はことばの最小の単位である。

[2] 次の各文を文節に分け、その切れ目に/を入れなさい。また、自立語に——下線をつけなさい。

①ほ と り に 松 も あ り き。 (土佐日記・二月十六日)
訳: (以前は、その)そばに松もあった。

②あ や し が り て 寄 り て 見 る に、筒 の 中 光
り た り。 (竹取物語・かぐや姫の生ひ立ち)
訳: 不思議に思って近寄って見ると、筒の中が光っている。

③翁、竹 を 取 る こ と 久 し く な り ぬ。 (竹取物語・かぐや姫の生ひ立ち)
訳: 翁は(黄金の入っている)竹を取ることが長いあいだ続いた。

④魚 と 鳥 と の あ り さ ま を 見 よ。 (方丈記・四)
訳：魚と鳥とのありさまを見るがよい。

第三節 古文の文の構造

文の中では、ことばの一つ一つが、ある順序に従って、人間の思いや姿を描き出している。文に表現されている内容を正しくつかむためには、文節相互の関係を明らかにして文の構造をとらえることが大切である。

1 文節相互の関係

文節と文節とが、文の中でお互いにどんな関係をもってつながっているかをみると、およそ次の六つの関係に分けられる。

文節と文節の関係	主なはたらき	古文の具体例
①主部・述部	何が→どうする 何が→どんなだ 何が→何だ	月 おもしろし 主部 述部 (竹取物語・昇天)
②修飾部・被修飾部		
ア. 連体修飾部	どんな→もの (体言)	苦しき ことも やみぬ。 連体修飾部 被修飾 (竹取物語・生ひ立ち)
イ. 連用修飾部	どのように→する どのように→どうだ	みの虫 いと あはれなり。 連用修飾語 被修飾 (枕草子・四三段)
③接続部	どうだ けれど →どうだ どのようならば →どうする	死期すでに近し。 されども いまだ 病急ならず。 接続部 (徒然草・二四一段)
④独立部	他の文節と 直接関係がない	あな、めでたや。(スバラシイヨ) 独立部 (徒然草・二三六段)
⑤並立部(対等部)	ものと=ものと どうして(そして) =どうする	あるじと 住みかと無常を争ふ… ↑ (並立部) ↑ (方丈記・一)
⑥補助部・被補助部 (補助部が下に付 いている)	どうする→下に 補助する文節	この戸 開け たまへ。 被補助 補助部 (伊勢物語・二四段)